

「東南アジア研究」の発刊に寄せる

京都大学総長 平 澤 興

本学における東南アジアの研究は、個別的には従来いろいろの形で行われて来たが、その間における総合的連絡には乏しかった。今回、この方面の研究をできるだけ総合的に進めるため、その連絡発表を容易にする目的で定期的に機関誌「東南アジア研究」が発行されるに至ったが、まことに喜びにたえない。これによって、必ずやこの方面の研究は一段と総合的となり、活潑になることだろう。

文化史的に見れば、アジアは実にすばらしく豊饒の地である。ナイル河流域のエジプト文明、チグリス、ユーフラテス流域のメソポタミア文明、インダス川流域の印度文明、黄河流域の中国文明など、四大文明の発祥地で、めまぐるしい民族興亡の中で咲いたり萎んだりしているが、しかし、人類文化の全体的把握には、この地域の過去及び現在を明かにすることは絶対に必要であり、われわれが東南アジアの研究を企てているのも、この角度からに外ならない。肩をいからしたり、肩をすばめたりせず、平安な、愛情と尊敬に満ちた謙虚な心でこの研究をなしとげて、アジアに住む日本人学徒としての使命を果したい。われわれは、ただ冷たい研究者としてではなく、この研究を通して、狭くしてはアジア、広くしては全人類に奉仕するのである。宇宙時代は原爆の時代ではなく、各民族が互いに尊重しあつて手を握る世界家族の時代である。

人類の歴史は古いようでもあり、新しいようでもある。ジャワ島の直立猿人が約五十万年前だとしても、クロマニオン人、上洞北京人等の新生人類の出現が五万年前後、いわゆる歴史時代が僅かに五千年乃至一万年だとすれば、見ようによっては人類はまだ若い。だが何れにせよ、人類興亡の五千年乃至一万年の中で、今日の如く世界の全人類がともに談じ、地球時代から宇宙時代にまで進みつつある時代はなかった。この点では現代は正に未曾有のすばらしい時代ともいうべく、もし人類がその悲願ともいうべき平和を守り得れば、確かに人類の将来は明るい。しかし、それはただ手離しでは望めず、それには何よりも先ず民族相互間の温かい友情が必要であり、この友情には、その民族の血と歴史に対する正しい理解が前提となる。研究の必要はここにある。

今日の人類文化を見て、恐ろしいと思うことは、その体質が調和のとれたものではなく、自然科学の進歩と精神科学のそれとの間に著しい不調和があることである。たしかに自然科学は、現在宇宙時代に入りつつある程、驚異的な発達を遂げつつあるが、精神科学方面の発達に

は、なお遙かに多く望みたいものがある。これは既に多くの人々によって指摘されているが、人間を人間的たらしめる最も基本的な条件が、まず精神的方面にあることを思うと、決して強調されすぎることはあるまい。

しかも、この精神的方面或は道德方面の弱点は、国際間の政治道德において極まると言ってもよく、正しい国際道德の確立は、人類に与えられた共通の問題であり、学徒の問題でもある。自然科学における最新の進歩が、たとえば原子爆弾などの如く、人類破滅の方向に用いられるなどということは、まことにナンセンス中のナンセンスである。科学の目的は絶対に破壊にあるのではなく、あくまでも人類の進歩とその幸福増進のためにあるのである。これはまた、東南アジア研究における、われわれの基本的態度でもある。

東南アジアの研究に当って、何よりも先ず確認しておきたいことは、この研究があくまでもその地域の科学的究明を目ざしており、いかなる場合にも政治的立場はとらないということである。民族や国家がおかれている現実にはいろいろあるが、その真相はただ何ものにも囚われない公平な思索と研究のみが之を明かになし得るもので、この点では学者はあくまでも謙虚であり、誠実でなければならぬ。時代が異なり、民族が異なり、歴史的環境の異なるような場合には、正しい判断は至難中の至難事である。自然科学ではまだその客観視が比較的容易であるが、人文科学や社会科学では、現象のうしろにある見えざるもの、たとえば、意識下のものまでも正しく把握せねばならず、それだけ困難は大きいのである。同時代に住む同国人の動きさえも、環境や職業などが違ふと、その判断は必ずしも容易ではない。ましてや異なる民族、異なる歴史の中で育った文化に対する理解の困難さは言を俟たない。しかし、逆に言えば、そうだからこそ、異なる文化の究明には、ますます深い研究と精進とが捧げられねばならぬ、ということにもなる。

異なる文化や生活の理解には、いろいろその幅や深さに違いがあり、そのものずばりという風な理解は容易ではない。理解したつもりでも、たとえば現在の自己の立場に立っての理解もあれば、或は自己のものさしではなく、異なる環境、異なる時代そのものにおけるものさしに焦点を合せた理解もあれば、更にはまた、以上両者を合せた最も客観的、総合的な理解もある。もちろん、実際にはこれ等の見方が別々に行われるというのではなく、深い準備とたしかな批判力があれば、おのずから正しい総合判断が得られるはずであるが、これはなかなか困難なことである。ただ強調したいことは、自分では正しく見ているつもりでも、人間的理解には、直接意識の表面に浮んでくる意識的要素のみならず、感情面などでは知らぬ間に意識下の要素なども働くので、精神科学の研究には、単なる理知のみならず、かかる意識下の要素までも計算に入れねばならず、格別の落ちつきと透徹した理解とが必要だということである。

東南アジアの研究に当って特に私はこれを強調したい。東南アジアに就ては、部分的には既に欧米学者による優れた研究もあるとのことであるが、問題は現象の把握の深さ如何にあり、

ここに日本人による研究の一つの特質があるように考えられる。それは、われわれ自身がアジアに属するのだから、意識下面の理解などでは、われわれの方が欧米人よりも、真実に近ずき易いのではなからうかということである。現象を現象として記載することも意味があるが、より重要なことは、その現象を生み出す民族的人種的背景を正しく理解し、これを文化発達の一般的視野から擲むことである。

しみじみ思うことは、われわれはアジアに属しながら、あまりにもアジアを知らぬということである。ただに東南アジアのみと言わず、われわれは、もっと目をアジア全体に向けてアジアを知らねばならぬ。それは自らが立つ足許を知ることでもある。そして、この正しいアジアの理解を先ず日本に、そして更にこれを全アジア、全世界に紹介することによって、古いと言えば最も古く、しかも今新しく衣がえをしつつある歴史にみちたアジアを、全人類に正しく理解せしめねばならぬ。本学の内外を問はず、ひろく全日本の同学諸士の協力により、東南アジアの研究が穰り豊かなものになることを心から祈るものである。 （一九六三・五・三〇）